

## 鳥インフルエンザA (H7N9)

防衛医科大学校感染症・呼吸器内科教授

川名 明彦

(聞き手 大西 真)

**大西** 鳥インフルエンザについてうかがいます。

鳥インフルエンザというのは、いつごろから問題になってきたのでしょうか。

**川名** インフルエンザウイルスは非常に宿主域が広く、鳥、馬、豚などヒト以外にもいろいろな動物が感染しますが、一般的には種の壁があって、動物からヒトへは簡単にはうつらないと考えられていたのです。ところが1997年に香港で、そのときは鳥インフルエンザのH5N1というサブタイプのものですけれども、それが初めてヒトに感染して、その中の何人かの方がお亡くなりになりました。そのときから鳥インフルエンザも、まれにはあるけれども、ヒトに感染するのだと認識されたのです。

**大西** 今H5N1の話が出ましたけれども、今回のテーマであるH7N9はどういったものなのでしょうか。

**川名** H7N9は、これも基本的には鳥のインフルエンザと考えられていま

す。最初に出てきたのは2013年の3月ですので、まだそんなに昔のことではありません。2013年の3月に上海、中国の東部のほうでヒト感染例が初めて報告されて、その後、中国の東部を中心として、アウトブレイクが起きました。そのときは130~140人ぐらいの感染者が出ましたが、間もなく終息しました。2013年の冬に、中国で再び流行が起きましたが、それもまた暖かくなると終息して、今度は2014年の暮れから2015年の春にかけて第3波の流行が起っています。現在は、第3波がほぼ終わりかけている、そんな状況だと思います。

**大西** 世界の状況からいいますと、やはり中国が中心なのでしょうか。

**川名** これまでに出ているケースはほとんどが中国で、しかも中国の東部のほうに限定されています。中国を旅行して感染し、国外に出て発症したケースは、マレーシアやカナダなどで数名報告されていますが、流行はほぼ中国に限定されていると考えてよいと思

います。

**大西** それはどんな背景があるのでしょうか。

**川名** なぜ最初に中国から出てきたかというのは非常に難しい問題ですが、鳥インフルエンザの人感染例は鳥と人間とが非常に近いところで、密接な生活をしているところで出現しやすいと考えられますので、中国にはそのような背景があるといえるのかもしれませんが。例えば動物のライブマーケットといて、生きた鳥や家畜をそのまま売って、そのまま買って、自宅に帰って調理する、そういう文化のあるところで広がりやすいという背景があるかと思います。

**大西** このウイルスは、普通に鳥が持っているウイルスなのでしょうか。

**川名** そうでもないですが、中国で9万羽近い鳥を調べたところ、0.02%がH7N9ウイルスを保有していたというデータがあります。

**大西** これにかかった場合の症状は、普通のインフルエンザとあまり変わらないのでしょうか。あるいは、すごく重症化しやすいとか。

**川名** 人間は基本的にはめったに感染しないという理解でよいと思います。まれに感染してしまうと、初発症状は発熱、筋肉痛、倦怠感など、普通のインフルエンザとあまり変わらないといわれています。しかし、70%ぐらいが重症肺炎から急性呼吸不全を起こすと

いわれています。

**大西** かなり頻度は高いのですね。

**川名** 発病すると、かなりのケースで重症化するといわれています。

**大西** そうしますと、予防は鳥にさわらない、近寄らないことが重要なのでしょうか。

**川名** 今の段階ではヒト-ヒト感染は非常にまれと考えられています。基本的にはウイルスを持った家禽類、鶏ですとか、野鳥類との濃厚な接触が直接の感染につながってくるといわれていますので、ライブマーケットのようなどころに行かないこととか、病気の鳥や死んだ鳥に不用意にさわらないことが重要です。特に流行地域ではそういった注意をすることで、現段階では予防できると考えます。

**大西** 日本では特に検出されたことはないのですか。

**川名** 日本ではH7N9型のインフルエンザはまだ報告例がないです。

**大西** 次に治療ですけれども、従来のインフルエンザの薬は効くのでしょうか。

**川名** 今、日本国内で使われている抗インフルエンザウイルス薬であるノイラミニダーゼ阻害薬は、ウイルス学的には有効と考えられています。ですので、オセルタミビル（タミフル）、ザナミビル（リレンザ）、ペラミビル（ラピアクタ）ならびにラニナミビル（イナビル）は、いずれもH7N9にも有効

と考えられます。しかし、臨床的にはどの薬剤が最も有効なのか、あるいは適切な使用量や投与期間なども含め、よくわかっていない部分も多いのです。ただし、H7N9は非常に重症化するケースが多いので、疑ったら早期にノイラミニダーゼ阻害薬を使用することは世界の共通認識です。

**大西** 重症化した場合はなかなか救命はたいへんなのでしょうか。

**川名** これまで世界で、ほとんど中国ですけれども、だいたい660人ぐらいが感染して、260人ぐらいが亡くなっています。そういう意味からいうと非常に致死率が高い疾患です。

**大西** 呼吸不全のようになるのですか。

**川名** そうです。人工呼吸器を装着し、ICUに入室せざるを得なかったケースが7割近くあったと報告されています。

**大西** ワクチンなどは今開発されつつあるのでしょうか。

**川名** 最初に問題になった鳥インフルエンザA (H5N1) につきましては、世界的流行 (パンデミック) を起こすのではないかと危惧され、ワクチンが開発・実用化されました。これはプレパンデミックワクチンといいます。わが国でも毎年1,000万人分ずつ備蓄されています。ところが、H7N9は比較的最近出てきたものであり、そのワクチンはすでに開発はされていますが、現

在まだ治験段階とうかがっています。

**大西** 鳥インフルエンザといっても、様々なタイプがあって、少し混乱するのですけれども、このタイプはどういう位置づけと考えたらよいのでしょうか。

**川名** 先ほどお話ししたH5N1というタイプが人類にとって脅威だと最初に注目されました。

**大西** だいぶ騒ぎになりましたね。

**川名** それが最初に出てきてから18年ほどたちますが、それほど世界的に拡大してはいません。一方、H7N9は2013年に出てきたばかりですが、もうすでに700人近い感染者が出て、しかも毎年、冬になると出現してくるという、通常のインフルエンザと似た振る舞いを示してきています。また、ウイルス学的にも鳥ばかりでなく人間にも親和性を持ってきているといわれていますので、H5N1よりも人間の間で流行しやすいかたちに変異している蓋然性 (パンデミック・ポテンシャル) は高いかもしれません。

**大西** そうしますと、これから少し注意を払っていかなければいけませんね。

**川名** 現段階ではヒト-ヒト感染はほとんどないという認識でいいと思いますが、インフルエンザウイルスは変異しやすいという特徴もありますので、人間への感染力、感染性が高まる形質を獲得してくる可能性も考えて、注意

し観察していく必要があると思います。

**大西** 先ほどお話があった最初のH5N1は現在どんな状況になっているのでしょうか。

**川名** H5N1も中国から出てきたものですが、その後、ベトナム、インドネシア、カンボジアなど、主に東南アジアを中心に流行してきました。実は最近ではエジプトで多くの患者さんが出

ています。エジプトでの流行は、これまでの流行の中で最も大きい規模ですので、気をつけて見ておく必要があると思います。

**大西** これからそういったことも念頭に置いて診療に当たるといことですね。

**川名** はい。

**大西** ありがとうございます。